

沖縄県中城城建築群の創造復元について

三上訓顯

建築空間も、出土品同様に往事の規模を残している復元の大きな手がかりだ。中城城は、城壁が残されており空間の手がかりがある。そこで本稿の目的は、沖縄県中城城の上物建築群の創造復元を試みることにある。その方法として城壁規模から往事の必要施設機能の抽出やゾーニングをおこないつつ、他方で出土品と気候環境にもとづき復元をおこなった。出土品からは当時の高麗瓦や大和瓦といった屋根材が発掘されず、また遺構も残されていないことから、木造茅葺きで琉球民家様式に近似の建築であったとする解釈をおこない、施設機能やゾーニング、動線といった建築学上の手法を用いて、建築群の創造復元を試みた。その結果、いくつかの不明点も残るが、建築空間の機能と規模面では、南山時代に、この程度の建築群は存在していたとする復元像を形成することができた。この巨大城の建設動機が何かと思いを巡らせれば、それは農本社会というよりは、交易国家としての琉球の姿が垣間見えるのではないか。

キーワード：琉球、南山時代、中城城、城壁跡、建築群、創造復元

1. はじめに

現在、沖縄県内で世界遺産に登録されている城跡は、首里城、今帰仁城、中城（なかグスク）城、座喜味城、勝連城の5城である。本稿では、中城城をとりあげる。

本稿執筆時に、全国に蔓延していた新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のため外出自粛を余儀なくされ、調査も大方済んでいたが詳細な部分で詰めていないところがあった。しかし収集済資料を基に上物建築群の創造復元モデルを制作し中城城の全体像を描く試論を展開することにした。このように基本資料が揃っていたので論述を先に進めることとした。

中城城は、建設当時の城壁が現存しており、また部分的に発掘調査によって出土品も相当数が発見されている。

沖縄県には62城（注1）が確認されているが、そのなかで、これら5城は城壁の規模でいえば巨大グスクであった点が共通している。なかでも最も新しく戦前まで建築群が残されていた首里城を除けば、いずれも琉球王朝成立以前の城であり、我が国では鎌倉時代から室町時代にかけて造営された城である。

図-1は、中城城創建時から設えられていた城壁の表門である。緩いアーチ状を描く門は、土木史で熊本県の通潤橋、

壺台橋、長崎県の眼鏡橋と数える程しかない。

そこで本稿では、歴史、発掘調査（注2）による出土品、気候環境、城趾の空間規模を踏まえ、中城城全体の建築群の創造復元モデルの提案をおこない、建築学上の知見を得ることが研究目的である。空間も史実の一つであり、空間規模は当時と変わらないから、建設可能な建築群の空間規模もおしはかることができると考えている。また創造復元とは、当時の日本やアジア圏の建築形態や技術水準を踏まえ、おそらくこうであったとする可能性に従って全体像を



図-1. 現在の中城グスク城壁表門（2017年筆者撮影）

■ 4 沖縄県中城城建築群の創造復元について

空間的に復元してゆくことと定義する。それは今後の議論のための、そして創建当時の城全体の姿を現在に蘇らせるための仮説モデルの一つとして位置づけられよう。

研究方法は、創建当時の建築技術水準、歴史、発掘成果、気候環境、城郭の空間規模を踏まえながら、建築学の手法を用いておこなってゆくことにした。

2. 中城城の歴史

中城城の年表(注3)を表-1にまとめた。年表では、本稿に關係する部分を抽出した。これによると、14世紀中頃に按司一族が築城をはじめ、14世紀後半に完成し、1440年に護左丸が城主となり、1458年に勝連按司によって護佐丸が滅ぼされ、以後首里王府の直轄地となっていた。

その後1606年に薩摩藩の侵攻、1729年に中城番所が設置され、1853年にマシュー・ペリー艦隊が中城城を訪れ4点のスケッチを残している。

その一つが図-2(注4)である。城郭内に1件の建築プランが描かれているが、これは1729年に置かれた番所とみられる。

さらに同様の図-3に、ペリー艦隊作成のスケッチをあげた。崩れかけた城壁の遠方に屋根瓦風建築が確認できる。この建築が番所のようなのだが、本稿では15世紀の城主護佐丸時代のものではなかったと判断している。従って現存する建築は皆無だった。

以後沖縄戦で焼け出されるまで、番所は中城村の役所に転用されてきた。

以上の経過から考察すると、中城城の中世琉球時代の建築群は、14世紀中頃から順次建築され、14世紀後半には城全体の建築群を完成し、城主である護佐丸滅亡後も、中城王子の領地として存在し、そして1606年に薩摩藩の侵攻で焼き討ちにあって焼失したと推測する。14世紀中頃から約150年間、城郭内に上物建築群が存在していたとみられる。

従って中世琉球時代の上物建築群は、近世にいたる頃には既に存在していなかった、というのが本稿の理解である。

3. 発掘調査出土品について

「中城村の文化財」という報告書が中城村教育委員会から毎年刊行されている。これによると城壁復元に関連する国の補助事業として城壁内の発掘調査が複数回おこなわれている。本稿では、その中で、出土品数(出土された破片数)が中城城内他発掘地点と比較し圧倒的に多いことから、二の郭に着目した。これを集計したのが表-2(注5)である。発掘調査は、二の郭内の四カ所でおこなわれた。これらを用いて先ず層序と出土品内容について概説しておく。

層序は、第I層が沖縄戦以後の堆積層、第II層は、近世

表-1. 中城城の年表

中城城の歴史	関連する歴史
1200	鎌倉時代
1300	室町時代
1400	1406. 首里王統一
1400 中頃、先中城按司の一族が石積のグスクを築き始める。	首里王朝
1400 後半、南の郭、西の郭、一の郭、二の郭完成	安土桃山時代
1440. 護佐丸が王命により、座喜味グスクから移封、勝連の攻撃に備え、三の郭と北の郭を増築し完成させた。	1573
1458. 勝連按司阿麻和利が首里王府軍の総大将として中城城を急襲し、城主護佐丸滅亡	1603
1458. 護佐丸滅亡後、中城間切は王府の直轄地となる。	江戸時代
1470. 中城グスクと中城の領地は、世子である中城王子の採地となった。	1868
1600	1606. 薩摩藩が琉球に侵攻
1700	1729. 中城城一の郭に、中城間切番所が置かれた。
1800	1853. ペリー艦隊の奥地探検隊が、中城城跡の調査測量等を行った。ハインが4枚のスケッチを残している。
	1872. 琉球が廃止され沖縄県となる

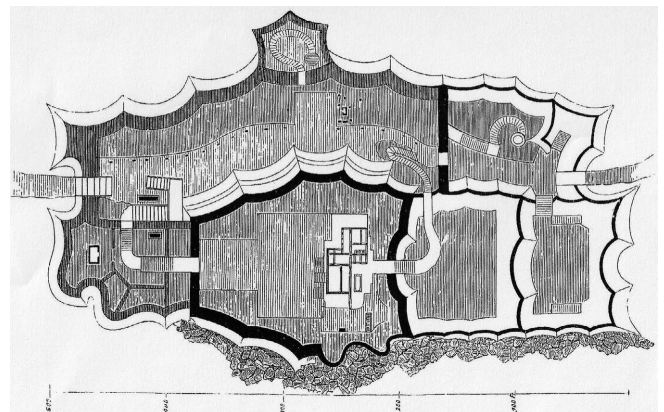


図-2. ペリーによる中城城跡測量図(注4)

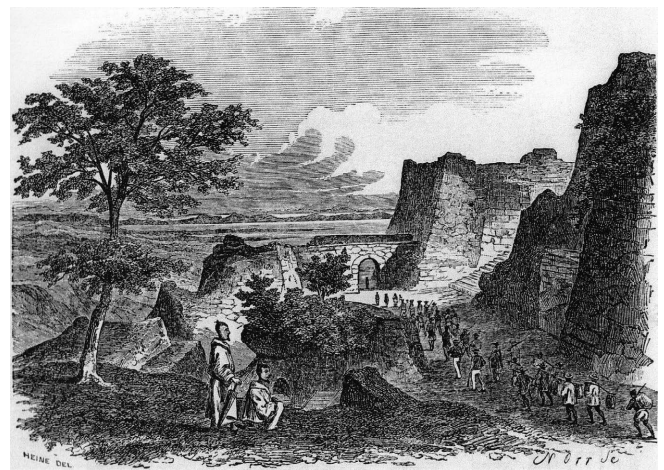


図-3. 中城城のペリーによるスケッチ(注4)

■ 6 沖縄県中城城建築群の創造復元について

先ず、青磁や白磁の、碗、皿、盃、壺、瓶などの食器や貯蔵用壺、そして香炉が出土されていることは、城内において城主や従者達の日々の生活がおこなわれ、さらには宴も催されていた事がわかる。宴には誰が登場したのか。諸国の按司や家臣達、或いは海外からの賓客をもてなしていたのだろうか。出土品をみると創造が膨らむところである。食器は輸入品が多くみられ、城主達の一定の生活水準や、当時の中城城が、執政に伴う執務、居住や食料の貯蔵と調理、饗宴、交易といった建築空間の機能も備えていたことが見えてくるのである。

次いで、筆者の既発表の浦添城（注7）や勝連城（注8）の論文で出土していた当時の高麗瓦や大和瓦が、中城城では見られなかった。参考のために二の郭以外の発掘調査の出土品をみても、こうした瓦の出土が皆無であった。つまり屋根材として瓦は使われてこなかったのである。

さらに建築の遺構は、僅かに列石が確認されるが、当時のものではなく、現時点で遺構跡は発見されていない。

4. 沖縄県の気象環境

沖縄県の気象環境について、任意の2019年1月1日～12月31日の那覇市の気象データ（注9）を用いて考察する。

それは琉球時代の気候ではないが、地球環境は温暖化傾向を除けば、気候風土が大きく変わったわけではないとする判断である。

沖縄県那覇市：愛知県名古屋市との比較で見ると、2019年の平均気温は、23.9°:17.0°、最高気温は33.9°:38.0°、最低気温12.9°:-2.2°となり、那覇市は名古屋市と比べれば気温の年格差が小さく冬がない気候であり、亜熱帯地方の気候である。さらに年間降水量は、2,040.8mm:1,555.5mmとなり雨や台風の影響が大きい。

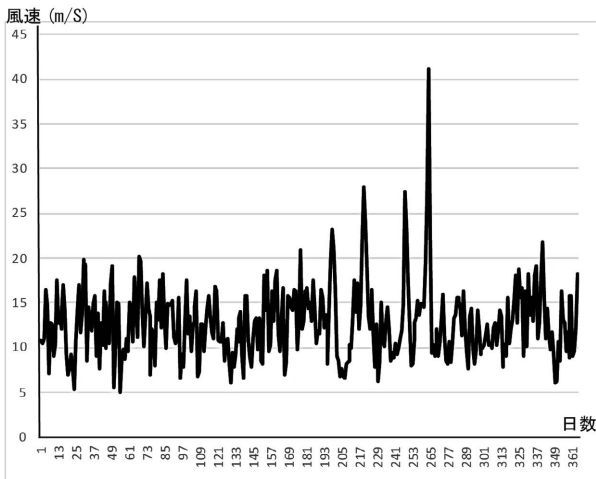


図-5. 年間の瞬間最大風速推移

図-5は、1日あたりの最大風速の1年間の推移を示した。縦軸は毎秒毎の風速(m/S)を示し、観測時刻前の10分間の測定値の平均値のなかで最大値を瞬間風速としている。通年でみると5～20m/Sの風が吹き、最大値の41.5m/Sは台風時である。那覇市は、島嶼であるため通り抜ける風が常時吹いており台風時の建築負荷も大きい。

図-6は、1日の瞬間最大風速が16方位のどちらの方角から吹いてくるかを日単位の出現頻度でみたものである。最多値は北の55日、次いで北北東51日であり、季節は10月～3月にかけてのシベリアや中国からの寒気団南下による北風である。次いで5月から7月頃にかけて、東、東南東、南東から風が吹いてくるカーチベイ（夏至南風）と呼ばれる沖縄固有の風である。

こうした気象環境が建築様式に与える影響は大きく、特に中城城の立地が山頂であることを踏まれば風害の大きさが予想される。台風時の風速と合わせて捉えれば、建築の配置や屋根や壁の形状に対して、相当の配慮が必要になってくるはずである。そうした気象環境を含む、この土地の風土が琉球固有の建築形態を形成してきている。

5. 中城城の配置

現在の中城城の配置を示したのが図-7である。地形図は、戦後に米軍が作成した地形図（注10）を用い、中城城が沖縄県内陸部に位置しているため戦禍をあまり受けなかった事から、概ね1400年代の地形を反映している可能性が高い。

その地形図にグレーで示した箇所は本稿で前述した発掘調査箇所である。地形図をみると南北に急峻な斜面によって防御されている事がうかがえる。

中城村のパフレット等（注11）によれば、中城城（所在地：沖縄県中頭群北中城大城503）は、面積110,473.0㎡、

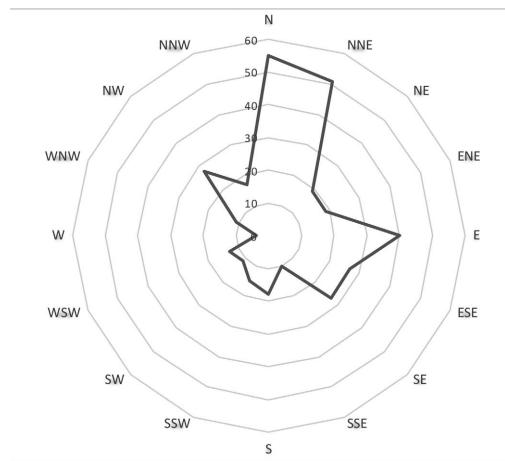


図-6. 年間の風配図

標高 150 ~ 170m の石灰丘陵上に位置する山城である。城趾は第二次世界大戦の戦禍による被害が少なく、沖縄の城の中では原型をとどめている数少ない城趾である。1440 年に座喜味城主護佐丸が王府の命令によってここに移り住み、1458 年に自害するまでの間に、北の郭、三の郭を、当時最高の築城技術で増築した。

さらに前述の資料では、一の郭は宴を催した観月台の跡、西の郭では兵馬の訓練がおこなわれた東西 120m の走路があったとする記述もあるが本稿では未確認である。さらに南の郭は複数の拝所を要し、北の郭の一部に城壁内に取り込まれて井戸が現存しているのは本稿でも確認している。さらに二の郭と三の郭では用途の記述がない。

地形図からみれば、正門の外が急傾斜地でありアクセス性は悪い。言い換えれば城全体で、防衛、自治、交易、生活といった諸機能がある程度完結性をもっていった可能性がみられる。

こうした城の概要をみると、先ず一の郭が正殿だとする説が支配的だが、そうであれば按司達の日常の生活の場はどこになるのだろうか。本稿では、一の郭に按司達の生活の場として居住空間や正殿が設えられた可能性が高いと判

断した。

次いで二の郭は、外部への大きな門跡があることから、地域の生産、あるいは交易、そして防衛などの小屋があったと考えられる。そうした城機能の全体配置は、首里城や勝連城などをみても類似性がみられる。三の郭は増築された部分だが用途不明である。

他方でこの城特有のゾーンは、西の郭である。正門から二の郭に通じる主動線の空間であると同時に、日本の城郭建築で多用されている枡形と考えられる。侵入してきた兵士達の隊列を上からねらえる構造なのだろう。

また南の郭は遙拝所があることから、自然信仰を旨とする琉球の祭礼ゾーンだったとみられる。西の郭と南の郭の境にあたる城壁が図ではみられないが、敷地の高低差があり、往事は城壁で仕切られていたと考えられる。

従って中城城は、南の郭、一の郭、二の郭、三の郭、西の郭、北の郭とする 6 ゾーンで隣接郭と関連づけながら、ほぼ明快地に分割されているのが特徴である。ここまでの考察結果にもとづいて空間上の作業仮説を次章で作成した。

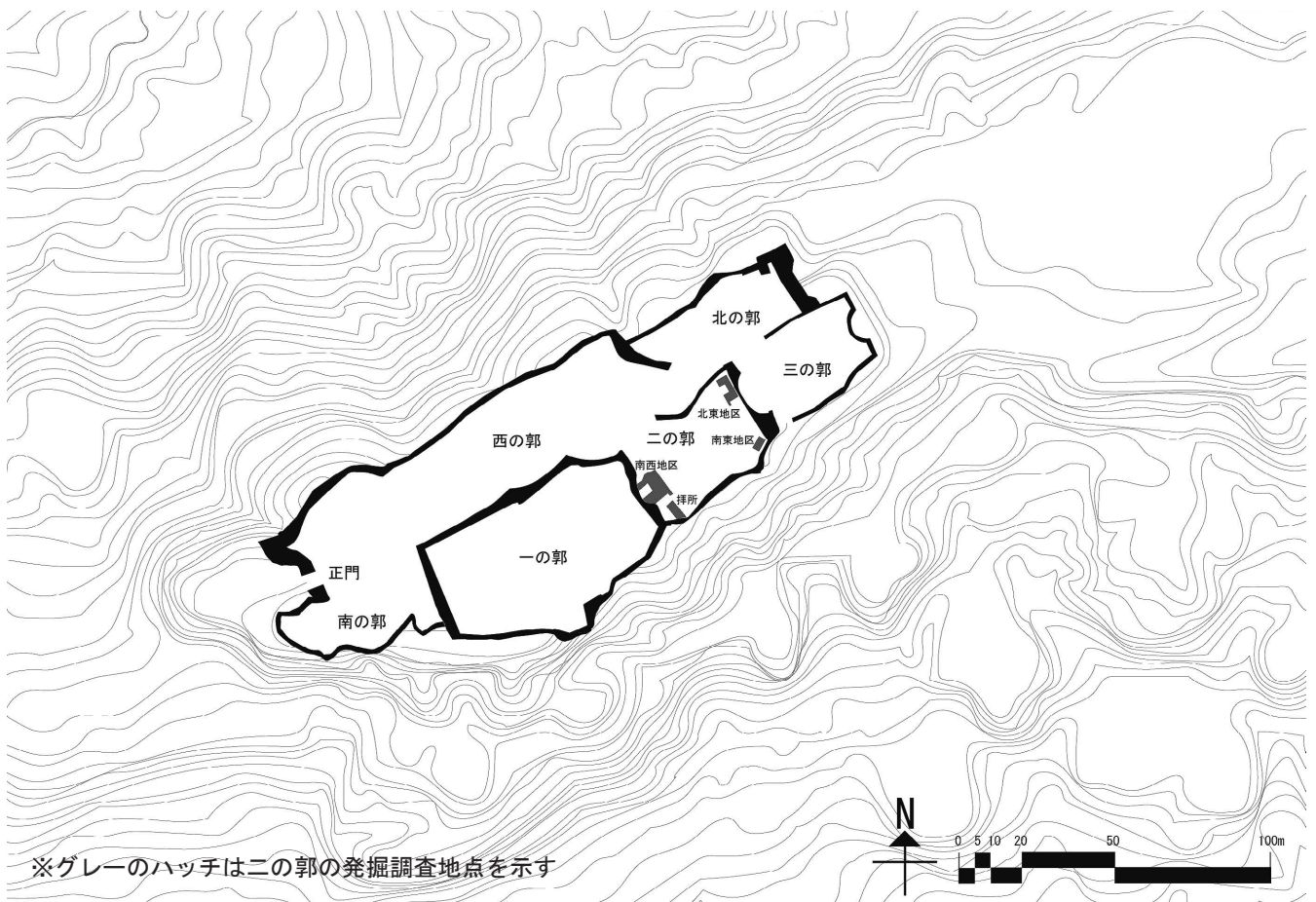


図-7. 現在の中城城の城壁配置図

6. 作業仮説としての建築条件の設定

中城城は、本稿で扱った勝連城とほぼ同時期に存在しており、機能上類似している可能性はある。本章では、出土品や気象環境にもとづいて建築条件を設定し作業仮説をつくることにした。次章で作業仮説を建築設計を通じて検証し、空間として納まれば一つの提案モデルが成立できるだろう。

表-3は中城城の施設構成を示したものだが、首里城の建築群を琉球グスクの完成形と捉え王宮としての最大機能を有していたと考えた場合に、これから機能を減じてゆく方法を用いた。

首里城建築群の空間配置をみると、交易や地方支配といった外向きの活動ゾーンと、王家の住まいに関わる生活ゾーンとが、本殿を介してゾーニングされ、空間が分けられている特徴がある。こうした史実を踏まえれば、中城城においても本殿を介して地方支配や交易の活動ゾーンと、王宮としての日常生活ゾーンとが機能分離されていたとみるべきだろう。

個別でみてゆくと本殿は、交易、祭祀、地域支配、軍事などの活動の節目あるいは象徴的空間として、勝連城でも存在していた事が確認されており、同様に中城城でも存在していたと考えられる。

本殿を介して生活ゾーン側では、王や王妃の日常生活空間である書院、黄金御殿、二階殿、寄満、料理座、台所、があったと考えられる。王家の生活を支える必要機能なので、この程度のは城郭内の建築群として存在していたと、本稿では判断した。

他方本殿を介した活動ゾーン側は、交易や地方支配のための近習詰所、番所、奉行詰所が必要であり、機能上生活ゾーンとは異なる空間に配置されていたと考えられる。

そのほかにもどちらのゾーンにも配置可能な銭蔵、金蔵、交易の跡を示す用物座があったのだろう。さらに農機具や

貨幣などの鋳造をおこなう、鍛冶屋も存在していたと思われる。

琉球時代の城に共通して出現するのは、本殿に隣接している御庭(ウナー)である。中城城の外部からのアクセスは、城門、御庭、本殿とする空間の構成は、他の城と変わらないと考えられる。

以上の施設を城郭の空間上に配置したのが、図-8のゾーニング概念図である。本殿、御庭を介し、王宮としての生活ゾーン(黄金御殿、二階殿、寄満、料理座、台所、書院)と、地方支配や交易のための活動ゾーン(近習詰所、奉行詰所、番所、銭蔵、金蔵、用物座、鍛冶屋)とで空間上明快にゾーニングされていたと考えられる。

アクセスは城郭の構造から読み取ることができ、正門、西の郭を経由して二の郭、そして一の郭に到達した事が明快である。そうすると本殿の位置がおのずと定まってくる。本殿が二の郭にあったとすれば、空間規模が小さいため、本殿は配置できても、その他の建築群を関連づけて配置するのは空間規模からみれば困難である。従って一の郭に本殿とその他の建築群を集約して配置した方が建築学の立場からは合理性があるといえよう。従って本殿及び関連する生活ゾーンの施設は一の郭にあったと考えられる。これを作業仮説1としておく。

次に一の郭に関連する生活ゾーンの建築群の配置について考察してみよう。

空間上先ず考慮する必要があるのは、沖縄の気候風土である。台風の通過地域であり、山城であることを考慮すれば、こうした風雨への備えとして建築の外壁が必要になる。

従って城壁と外壁によって風雨への備えを配慮した建築群であることは容易に理解できる。

図-9は一の郭の建築群の配置概念図である。北から北北東、東から南東、カーチベイと地元で呼ばれている南から

表-3 施設構成

首里城施設内容	用途	可能性評価		
		浦添城	勝連城	中城城
正殿	王を中心とする祭祀がおこなわれた聖域空間。	○	○	○
北殿	摂政、三司官が重要事項を審議する場所、冊封司の接待の場所。	×	×	×
春神門・納殿	平時は薫、茶、煙草などを取り扱う。神女達が神をもてなすところ。	△	×	×
黄金御殿(クガニウド)	王や王妃の居室。	○	○	○
近習詰所	行政に関わる官人などの詰め所で番所に隣接。	○	○	○
南殿	過年で日本式の行事がおこなわれた場所。薩摩の役人の接待所。	×	×	×
番所	行政施設の玄関、取り次ぎ、南殿と隣接。	○	○	○
鎖の間	王子らが薩摩の賓客や知人を接待したところ。	×	×	△
書院	王が日常政務、行祭事、冊封司の接待場所としても使われた。	○	○	○
奉行詰所	官人、奉行役人などの詰め所と推定。	○	○	○
二階殿	王の日常の居室や寢室。	○	○	○
寄満(ユインチ)	王や家族の食事所。	○	○	○
世添殿(よそえでん)	御内原を管轄し、王夫人の住居。	○	×	×
世錦殿	王が死去した際の継承者が即位の礼を受ける。	○	×	×
女官居室	御内原に勤める女官達の居室。	○	○	○
西の当蔵	不明。	×	×	×
廊下	正殿と北殿や南殿をつなぐ。	△	×	×
喪庫殿	王死去の際の霊柩安置所	△	×	×
料理座	儀式の料理や使者、官人などの饗宴の料理を調達したところ。	△	△	○
大台所	賓客の料理や、米、砂糖、漬物などを取り扱っていた。	○	○	○
佐敷殿	王妃の諸用を扱うところ。	×	×	×
銭蔵	金銭、酒、薬類などを取り扱った。	○	○	○
金蔵	銭倉同様の蔵だったと推定した。	○	○	○
系図座	士族の家譜や王府の書類編集に関する業務をおこなう。	×	×	×
用物座	中国や日本との貢物を取り扱う。	×	△	○
鍛冶屋	首里城には存在しない。	○	○	○

○:存在、△:不明、×:存在しない

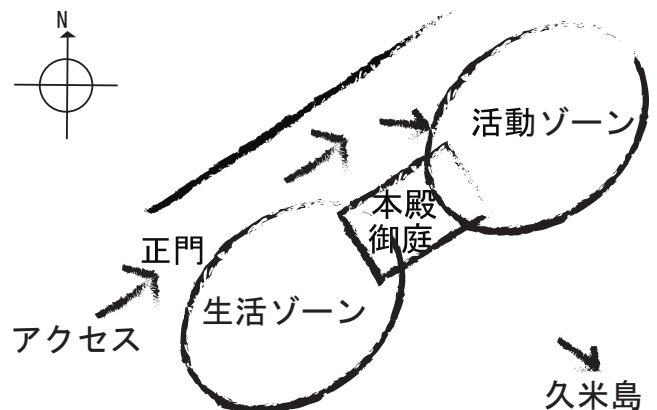


図-8 施設のゾーニング概念図

西南西、西北西と、比較的多方向からの風を受けている。これに台風が加わり、ほぼ周囲から年間を通じて強い風が吹きつけてくる環境にあったとみられる。

従って建築群の配置も風雨をしのぐ必要がある事から隣接していたと考えられる。城壁に背を向けるように建築群の外壁が連なり、高温多湿であることからウチナーと呼ばれる中庭を設け、雨端(アマハジ)と縁側を設え、内に向き合うように建築群が配置されていたと考えられる。これを第2の作業仮説とする。

なお築城時代が琉球三山戦国時代であり、実際に城壁内側に兵士達が敵の攻撃を避けながら弓矢を射るなどの場が設けられており、それが城壁周囲全体にわたって続き防衛上の動線が確保されていた。

7. 作業仮説の検証：建築群の配置と空間構成

前章の作業仮説を、建築設計をつうじて空間規模から検証してみよう。中城城の建築群の配置図を図-10で示した。

配置に関しては、先ずアクセスが正門を経て西の郭を経由し、二の郭から表門を経て一の郭に到達する動線であることは、城郭の構造からして空間上明快である。最も敷地面積の大きいのが一の郭であることから、ここに城郭内の建築群が集約配置され、施設の機能集約がはかられたとすれば、一の郭に城門を設け堅固なしつらえにしようとする意図があったことは空間から読み取れる。

建築群の配置を考えると、一の郭に建築群が集約配置されると、それでは二の郭や三の郭の用途は何かとする疑問がわく。一つには、戦時の兵士達の野営スペースとして広い空間が必要だったと考えられる説である。そうであれば二の郭は取次用の番所程度が設けられ、その他は御庭の一部として広い空間が設けられていたと判断した。

三の郭は増築された部分であり、出土品からみても他の郭同様であり、ここの用途を推測する手がかりには至らなかった。北の郭には二つの井戸が発見されていることから城の

生活用水確保の空間として機能していたとみられる。西の郭はアクセス動線であり柵形でもある。南の郭は、御嶽(うたき)やひぬかさんの跡が複数見られることから、拝所として使われてきた空間だとみられる。

公開文献(注12)では現存する城壁の一部が低い石垣とする図面表記になっているが、本稿では一定の高さの城壁が全て立ち上がっていたと想定している。

次に一の郭内の建築群の空間構成について検証してみよう。

これまでの発掘調査において中城城の本殿遺構跡は発見されておらず、現地調査で敷地の一部に建築跡を示す列石がみられるが琉球時代のものではないと判断した。

着目したのは、一の郭内の敷地面積の1/2が奥側にレベルが約3尺高くなっていることから、これは大規模造成工事を伴い、建築群が建てられる以前に工事をしておく必要がある。従ってこのレベル差は琉球時代から存在していたと考えられる。

そこで空間構成の視点から、このレベル差の横断面方向の中央に本殿を配置し、本殿のセンター軸と表門の中心とを結ぶと、斜めに本殿へアクセスすることになり、首里城のアクセスと類似してくる。こうしたアクセスが当時から存在していたとする史実や技法や意図はわからないが、本稿では空間構成の手がかりの一つとしている。図-11で一の郭の建築群の平面図を示した。この意図について述べておく。

先ず御内原を設け、これを囲むように各建築を配置してみた。沖縄民家固有の居室様式である表座と、倉庫や炊事などの裏座をもうけた間取りを基本とする平面が構成できる。さらに御内原に面して各建築は、6尺幅の縁側と雨端を設けることができる。建築群は密接に隣接しているため、雨端が建築間の移動空間として機能し、中世日本建築にお

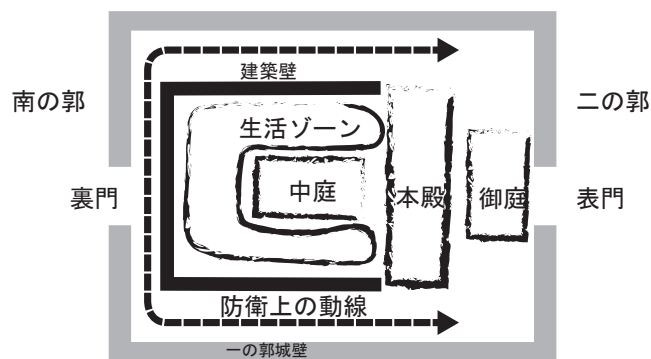


図-9 一の郭建築群の配置概念図

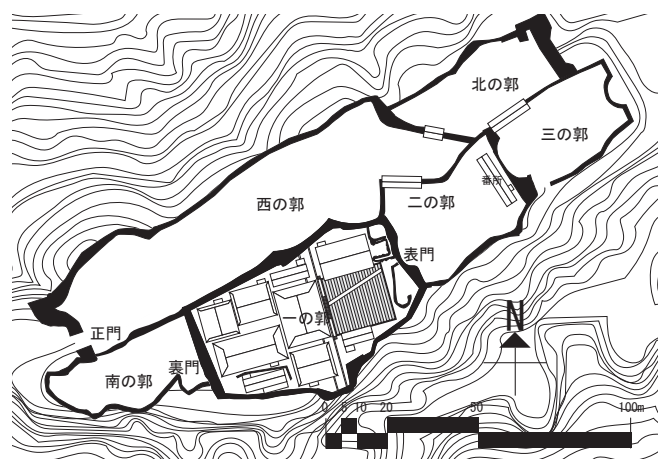


図-10. 中城城創造復元による配置図

ける外廊下の役割を持たせられる。

建築構造は基礎が土中に杭を埋め込む方法か、敷石を敷いたかは不明である。だが建築規模からすれば土中杭基礎は大きなスパンの建築物では構造的に難しいと判断した。従って敷石を設けたというのが本稿の理解である。

本殿は勝連城本殿を参照し8尺の柱間とし、それ以外の建築群は居室の広さから6尺の柱間としている。畳のサイズでみれば6尺の柱間は空間上適切である。

屋根材料の手がかりは、各郭の出土品リストを縦覧したが、高麗瓦や大和瓦の出土が皆無であることから、茅葺き、こけら葺き、あるいは石を積んだ板葺きだったとみられる。本稿では、本殿と生活回りの建築群を茅葺き、奉行所など外向きの施設を板敷きと設定している。

建築の外壁は、前述した図-6風配図にもとづき城壁側は、季節風や台風時の風をさけることから、すべて板張りとし開口部を設けなかった。

従って各建築群は、御内原に向かい合う構え方となり6尺幅の雨端と縁側によって各建築群をつなぐ動線ができる。

雨端は建築間移動の動線と玄関の役割を併せ持ち、縁側は居空間移動の動線であるとともに、日常生活の諸々の所作がおこなわれた意味的な空間である。

まとめると、屋根勾配は6/10、軒高8尺～9尺、柱間は本殿が8尺、その他の建築は6尺を空間のモジュールとして建築平面を構成することで、一の郭に空間上納まることがわかった。

以上の条件を踏まえて前述した表-3であげた各施設を配置すると、番所以外の機能が一の郭におさまリ、さらに御庭も設えられる空間規模である。空間規模として納まるなら、前6章の作業仮説1と2は成立してくる。

こうして一の郭の西側が按司達の居住などの私的生活空間であり、本殿を介して、東側が賓客をもてなすなどの公的空間であれば建築学上合理性ある空間配置になっていたと考えられる。

一の郭に施設機能の大半が集約されると、郭両端のアーチ式城門が防衛性をたかめる必然性も出てくるだろう。このように本稿では、一の郭に、施設の機能集約をはかった

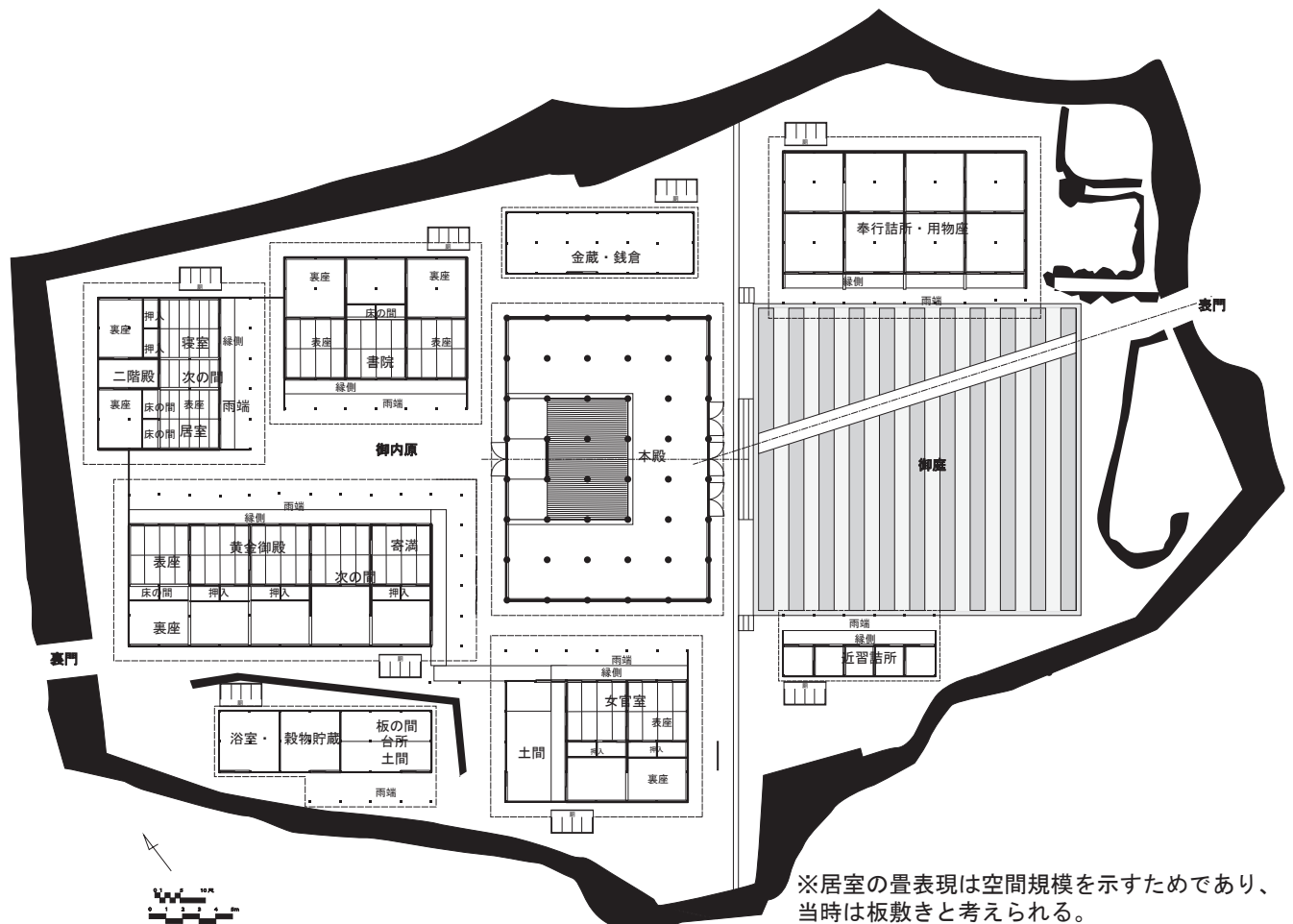


図-11. 一の郭建築平面図

ことが中城城の建築空間上の大きな特徴であったと考えている。

これまでの考察を踏まえ、中城城建築群の創造復元の姿を3DCGで表したものが図-12である。城壁の立面、断面のディテールに関わる設計史料がないので、城壁につけられているテーパー、GLレベル差、城壁の詳細など寸法関係で不明な点が幾つかあることをお断りしておく。

以上の検討の結果、各郭のなかでも最も標高が高く、面積が大きい一の郭に、按司達の生活空間や本殿、さらには

祭祀や交易による賓客接待などがおこえる御庭を集約して配置することができた。これは当時の民家の合理性、さらには建築学上からみれば、このような建築空間であれば、この土地の気候風土のなかで成立できるということである。

二の郭は、一の郭に配置する必要性が薄い機能として番所を配置した。これは年貢などの取り立てや地域の裁き事などの対応にあたるのであれば、二の郭への配置が好ましく、西の郭同様に防衛上の柵形の役割を併せもち、戦時の兵士達の野営場所として広い空間を使うところもできる。

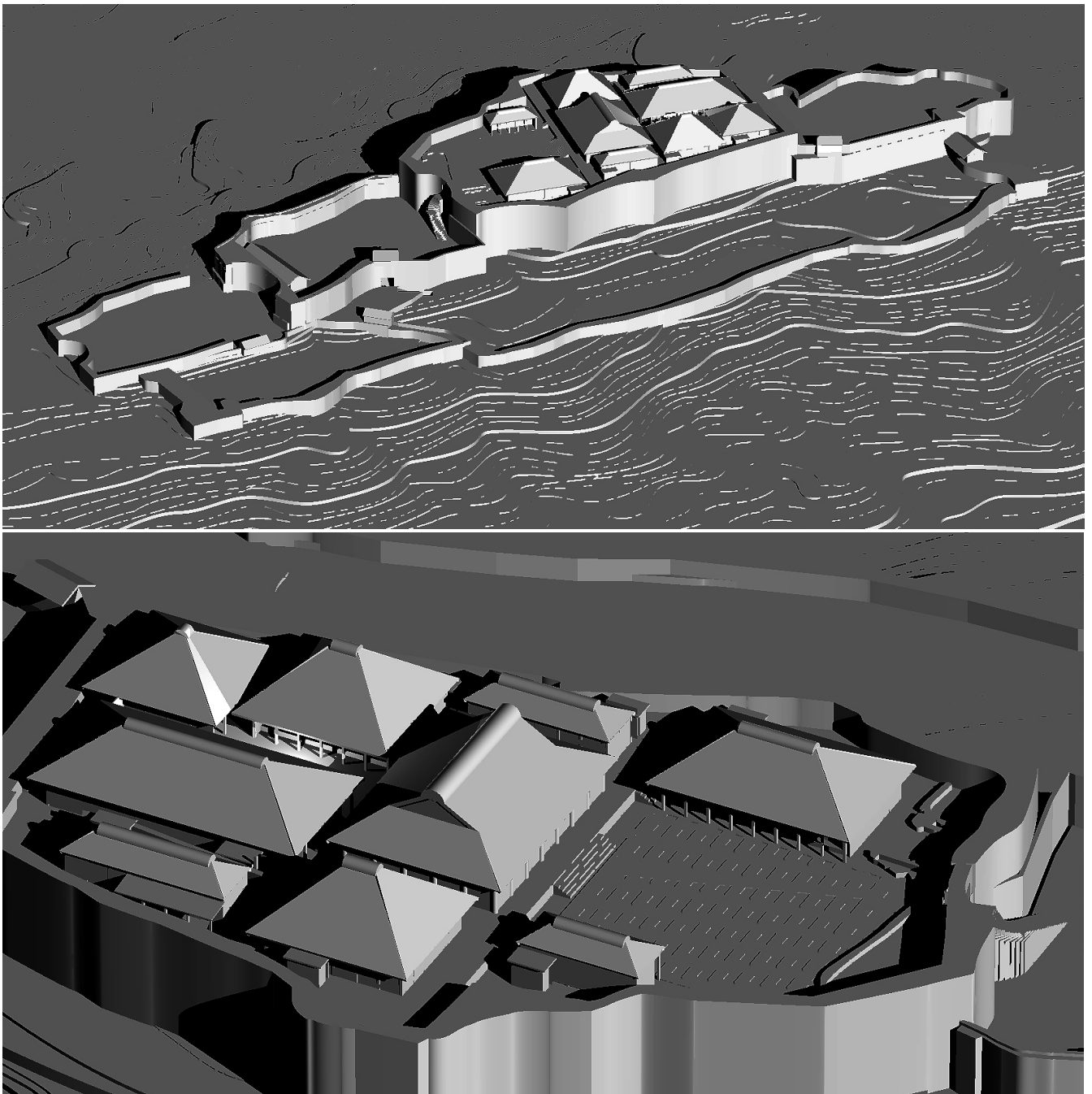


図-12. 中城城 3DCG

三の郭を特徴づける出土品はみられなかった。したがってこの空間がどのように利用されたかは現時点で検証できない。一の郭に続く南の郭は、ひぬかん様などの跡が現存しているの、自然崇拝を旨とする琉球時代の祭祀空間、西の郭は正門からの長いアクセスを必要とされる空間だが、それは防衛上の視点から設けられたとみてよい。北の郭は二カ所の井戸があることから水場として設けられた空間である。

8. まとめ

二つの知見がある。

一つは、多数発掘された輸入陶器や土器の出土品は、城郭内で王宮として日常生活が行われ、居住、祭祀、交易、賓客を招いての祝宴といったように、按司達の私的日常生活と公の生活とが一の郭内でおこなわれてきたと考えられる。

二つは、建築空間の合理性である。合理性とはこの土地の気候風土における民家の構え方や設え方の合理性である。我が国の民家を見れば、建築の配置や構造がその土地の気候風土を反映して建設されてきたことを教えてくれる。同様のことが中城城にもあったと考えられる。しかも山上に位置し低地よりは厳しい気候環境である。だからこそ気候環境に対する空間の設え方を必要としたと考えた。

城壁礎石の積み方をみれば、他城と比較し、中城城が卓越した積み方をしていることがわかる。それは当時の按司護佐丸の築城術によるが、同様に建築群の空間においても築城家ならではの合理性があったと判断している。というのもそれなくして、この土地に建築空間が成立できない、という理由からである。

琉球時代の創造復元も本稿で3事例目だが、多大な人力、技術、財政力を必要とする大規模な城の建設を、琉球の按司達はなぜおこなったかとする建設の動機付けが、今も解明されているわけではない。

幾重にも設けられた城壁は、本土の城郭建築における掘割とみただけでもでき、郭の御庭やオープンスペースは戦時の野営場所として必要だったとする理解もできるが、そもそも陣城であるならば兵士達が野営する空間が堅固な城壁で覆われる必要はない。あるいは単に権威を誇示し琉球の覇者たらしめる程度の理由では説明できない建設意図が巨大城にあったと考えられる。

そんな建設動機の手がかりを探ると、海外交易というキーワード(注13,14)がある。出土品から中国製陶器の破片が多数発見されていることから、海外交易によって大量の

人、物、資金が動き回っていた交易国家琉球の姿である。だから多数の機能を要した施設と建築群と巨大な城壁を必要とすることが建設の動機であったとするならば、建築学の人間としては理解できるのである。

注及び参考文献

注1) 當眞嗣一：琉球グスク研究，琉球書房，2012.

注2) 国の補助を受けて中城村が発掘調査を複数実施し、調査結果を毎年報告書として刊行している。

注3) 中城村広報資料による。

注4) 沖縄県中城村教育委員会：中城城整備基本計画，2013,p64-p65.

注5) 中城村教育委員会：中城村の文化財18集，中城城跡整備に伴う発掘調査報告書，2005.

注6) 沖縄県立埋蔵文化財センター紀要：沖縄埋文研究3,2005.

注7) 三上訓顯：建築史上の二つの経験，名古屋市立大学大学院芸術工学研究科紀要，vol.21,2016,p3-p18.

注8) 三上訓顯：沖縄県勝連城創造復元モデルに関する研究，名古屋市立大学大学院芸術工学研究科紀要，vol.24,2019,p3-p12.

注9) 沖縄気象台：沖縄県農業気象旬報2019年1月～12月.

注10) 米軍地形図，TOMARI,1/5000.

注11) 中城村：中城城跡パンフレットと中城村の文化財の記述を拾い出した。

注12) 財団法人海洋博覧会記念講演管理財団：琉球王府首里城，ぎょうせい，1993,p159.

注13) 高良倉吉：琉球の時代、ちくま学芸文庫，2019.

注14) 吉成直樹：琉球王国は誰がつくったのか、倭寇と交易の時代，七月社，2020.